

2015年2月4日
株式会社ストラトスフィア

**ストラトスフィア、ディザスタリカバリ対策や負荷分散に最適な
「Stratosphere SDN Platform 2.0」を提供開始**

株式会社ストラトスフィア（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：浅羽 登志也、以下ストラトスフィア）は、クラウドサービスやデータセンター運用業務を効率化するネットワーク仮想化プラットフォーム製品「Stratosphere SDN Platform」の機能を拡充し、ディザスタリカバリ（DR）対策や負荷分散に適した「Stratosphere SDN Platform 2.0（以下、SSP 2.0）」を2015年1月末より提供開始しました。

「SSP 2.0」では、新たに以下の機能を追加しています。

1. 通信路最適化機能（トロンボーン現象改善機能）
2. リダイレクト機能

1. 通信路最適化機能

事業継続性を向上させるためのDR対策のひとつとして、災害発生エリアのデータセンターから別のデータセンターへ、仮想マシン（Virtual Machine: VM）を動作させたまま移動させる「ライブマイグレーション」により、ユーザへのサービス提供を継続させる方法があります。この場合、次のような課題が考えられます。

課題：ライブマイグレーション時には、VMへの通信セッションを保持する必要があり、移動の前後でIPアドレスは変わりません。そのため、両データセンター間に仮想的なL2ネットワークを構築し、移動を同一のセグメント内で行う必要があります。また、そうしたデータセンター間を跨がるライブマイグレーションでは、移動後にVMが通信をする際に、同一データセンター内ではなく、移動前のデータセンターにある中継機器（デフォルトゲートウェイ）を経由してトラフィックが行って戻ってくる現象（トロンボーン現象）が発生してしまいます。

SSP 2.0では、L2トンネル機能でデータセンター間にL2ネットワークを構築し、通信経路を最適化する機能によって、これらの課題を解決します。本機能は、データセンター拠点の新設や統廃合時のVM移行にも同様に適用できます。

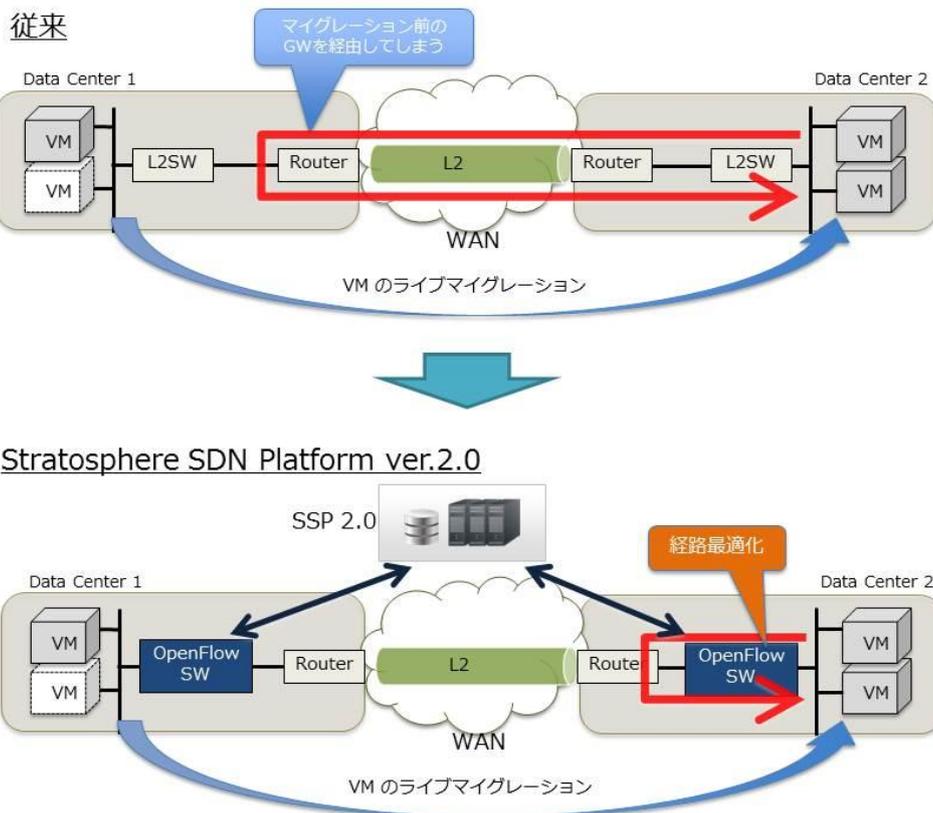


図1：ライブマイグレーション時の課題解決

2. リダイレクト機能

データセンター間での負荷分散やバックアップ/スレービング環境構築などを目的として、地理的に離れた複数のデータセンターに置かれたシステムを相互待機型（Active-Active）で稼働させる場合があります。その際には、次の課題が考えられます。

課題：使用するサービスがどこのデータセンターのどの VM で動作しているかをユーザに意識させないように、複数の VM に同一の IP アドレスを付与する必要があります。そのうえで、同一 IP アドレスを持つ VM への通信がある際に、適切な VM に振り分ける必要があります。

SSP 2.0 では、ユーザからのアクセスごとに適切な VM に通信させるリダイレクト機能により、この課題を解決し、クラウドサービス利用やデータセンター運用を効率化します。

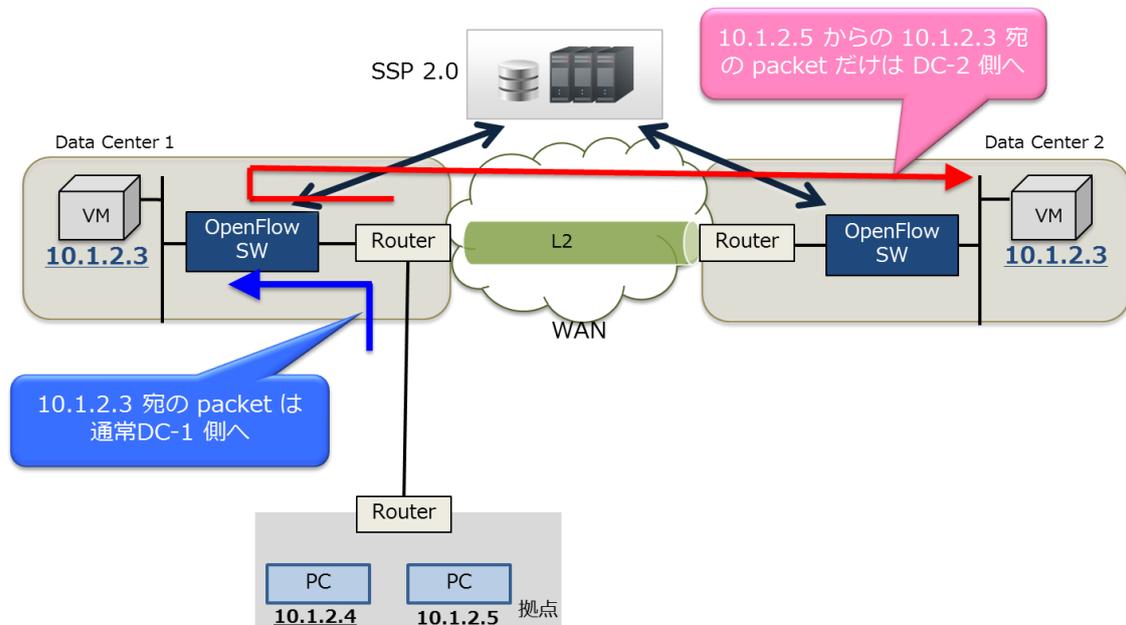


図 2 : Active-Active で稼働させる場合の課題解決

ストラトスフィアは、今後、クラウドやデータセンターだけではなく、通信ネットワーク全般および企業内ネットワークにもネットワーク仮想化の領域を広げ、様々なシーンで、NaaS（Network as a Service）を実現するソフトウェアプラットフォームの提供を目指してまいります。

■ストラトスフィアについて

株式会社 ACCESS と株式会社インターネットイニシアティブの合併会社として 2012 年 4 月 5 日に設立され、次世代クラウド環境に最適なプラットフォームの構築を目的として、SDN を実現するソフトウェアの研究開発を推進しています。

<http://www.stratosphere.co.jp/>